

古事記編さん1300年記念に寄せて・・その2

一日向神話を研究した鎌倉時代の学者たち―

宮崎県立図書館 郷土情報担当 徳永孝一

○ 日向古代史の解明―

宮崎県にとって、天皇家と深い関係をもつ日向古代史の解明は、永年の課題となっていました。そこで昭和13年(1938)のこと、若手の古代史研究家が招かれ、高千穂実業学校(現高千穂高校)の教師として赴任しました。その人の名は柳宏吉といいます。柳氏は、期待に応えるため神話の里高千穂に23年間居住し、ひたすら教育と研究に力を注ぎました。のちに宮崎県総合博物館館長として15年勤めています。氏は学術的見地から『古事記』や風土記・六国史などを深く研究し、夥(おびただ)しい数の研究論文を遺しています。以下、柳氏の紐解かれた日向古代の神話と歴史について、その一部を紹介します。

○ 風土記の逸文に注目―

柳氏は地方の事情を知るため、『古事記』や『日本書紀』と同時期に成立した風土記(郡司または国司の執筆)に注目しました。しかし『日向国風土記』の本文は、すでに失われていたのです。ただ幸いなことに鎌倉時代に書かれた研究書のなかに逸文(*イツブン、他書に引用されている文章のこと)として残っており、その中に天孫降臨説話も含まれていました。

てんそんこうりん 天孫降臨説話

―『釈日本記』の日向風土記逸文―

日向国の風土記に曰く、臼杵の郡の内、知鋪の郷。
あまつひこひこの みこと あま いわくら はな あめ や
天津彦彦火二日尊、天の磐座を離れ、天の八
えくも おしわ いつ ちわ ちわ
重雲を排けて、稜威の道別き道別きて、日向の高
ふたがみ みね あも そらくら
千穂の二上の峯に天降りましき。時に、天暗冥く
よるひるわ ひとみち もの いろわ が
夜屋別かず、人物道を失い、物の色別き難たかり
つちくも おほくわ おくわ い
き。ここに、土蜘蛛、名は大鉏・小鉏と曰ふもの二
まを すめみま みこと うづ みても
人ありて、奏言しく、皇孫の尊、尊の御手以ち
もみ な よも
て、稲千穂を抜きて粳と為して、四方に投げ散ら
あか おほくわら
したまはば、必ず開晴りなむ」とまおしき。時に、大鉏等
まを てち もみ な
の奏ししが如、千穂の稲を揉みて粳と為して、投げ
そらあか ひつきて
散らしたまひければ、即ち、天開晴り、日日照り
かがや よ ふたがみ みね い のち
光りき。因りて高千穂の二上の峯と曰ひき。後の
ちほ なづ
人、改めて知鋪と号く。(柳宏吉著作集(1)216頁)

○ 学者たちの「日向風土記」研究―

鎌倉時代中期、『日向風土記』(*当時までは現存していた)と『日本書紀』を比較検討する研究会が催されました。その時の出会者はト部兼文(兼方の父で当日の講師)をはじめ、宮中の天皇補佐・同代行・宮城諸門警衛・大臣代行・大宰府の長官などで、当代一流の学者たちです。研究会で次のようなやりとりがなされました。

・前関白:「高千穂」と「二上」の二所の地名は、どういう意味か

・ト部兼文:『日向国風土記』に「高千穂二上峯」とあるから、この二つは同所異名である。(以下略)

*『釈日本記(しゃくにほんぎ)』(ト部兼方編)

このやりとりについて学者たちは、異議を唱えなかったようです。柳氏は、このことから『日向国風土記』は、現地に伝わる「拠るべき古伝」ではないかと考えました。それゆえ「風土記」の天孫降臨説話は、『日本書紀』によって記されたものではなく、『古事記』には採択されていないが、奈良時代以前から現地に伝えられた「信すべき古伝」であろうと推定しています。なお『釈日本記』によれば、鎌倉時代の学者たちは、『日本書紀』と『日向国風土記逸文』双方に同様の記述がある場合は、風土記逸文の方を採択していました。(同218頁)



【高千穂野上の峯(上野よりの遠景)】



【同じ(中腹からの近景)】